

75年後の証言

～播磨人の戦争～



沖繩戦を生き抜いた 三枝 利夫さん (92) = 佐用町上三河

人間の心理状態ではいられない

1945年春。沖縄本島に上陸した米軍の攻撃を、当時17歳の三枝利夫さん(92)は何とか生き延びた。小塚基地近くの大嶺集落から2キロ離れた大塚本部を自衛して歩き始めたが、命を落としかねない場面に何度も遭遇した。

夜になって、三枝さんは仲間の一等兵らと3人で壕を出発した。しばらく歩いた所で、弾薬を積んだ米軍のトラックが一台、木陰に止めてあるのを見つけた。一等兵は殺気立ち、「これを爆破する」と言い出した。木箱に火薬を詰めたくくりの爆弾を背中から降ろそうとしている。「おい、やめとけ」。そう言おうとした瞬間、弾丸が飛んできた。8月ほど先から、米兵2人が自動小銃を向けている。

一等兵はその場に倒れ、動かなくなつた。三枝さんは無我夢中で、手に持っていた手りゅう弾を米兵に向けて投げた。命中したのか、攻撃がやんだ。倒れ込んだ仲間へ声を掛けることもなく、一目散で走り去った。

「仲間を見捨てて逃げたしまったのは心残り。手りゅう弾が米兵に当たっ



①旧三河村から志願兵として召集された4人。右から2人目が三枝利夫さん
②報道公開された旧日本軍第32軍司令部壕の第5坑道=6月30日、那覇市



たのなら、大げさをさせたか、死なせてしまったかも知れらん。でも、それは全部後になって考えたこと。あの時は、何も思わなかった。

大隊本部周辺は既に米軍に包囲され、近寄れなかった。仕方なく、糸満市方面に向かって歩を進めた。

三枝さんは6月19日、摩文仁にある軍司令部の壕にたどり着いた。沖縄戦が終わったとされる23日以降も、戦闘状態は続いた。陸軍の参謀らと共に壕を出たが、攻撃は昼夜を問わず緩むこ

とがない。一日一日を夢中で生き抜くうちに、感覚はまひしていた。

陸軍兵の遺体が投げ込まれた壕でも平気で数日間を過ごした。雨が降り続いていた。腐った肉がぬるぬると絡みついて、「かなわんなあ」。雑巾でぬぐい落とし、再び身を隠す。ホウフラが湧いた水も飲んだ。まるで野生動物のように。

「汚いとか怖いとか、戦場では一切感じなかった。人間の心理状

糸満市摩文仁 沖縄戦終局の地。司令部があった軍城が陥落した後、日本軍は本島南端の摩文仁へ撤退。陸軍中将の牛島満司令官らが自決し、組織的戦闘は終結した。現在は沖縄平和祈念公園があり、平和の礎(いしじ)には国籍や軍人、民間人の別を問わず、沖縄戦の全戦没者約24万人の名前が刻まれている。

感では到底いられなかった

大里村に到着し、しばらくした夜、突然、陣地という陣地からえい光弾が打ち上がった。空は真っ赤に染まり、花火のようだ。「これは何事だ。まるで祝賀会やないか」と言い合ったが、まさかそれが米軍の勝利を知らせる祝砲だとは夢にも思わなかった。

三枝さんはその後約1カ月戦場をさまよひ、9月13日、屋敷取宿所へと連れて行かれた。あれほど捕虜になることを屈辱的に感じていたはずなのに、既に何人も収容されている日本兵たちを見ると、そんな気持ちは消えていった。

シャワーで体を洗い終わる頃には「命だけは助かった。もう逃げ回らんでええんや」と実感した。少しずつ、人間らしさが戻り始めた。

「僕たちは小さい頃から兵隊さんの歌を歌い、戦争ごっこで遊んだ世代。学校では軍事教育も受けた。兵隊に憧れるのは自然なことだった」と三枝さんは振り返る。「若い人たちは、戦争の不幸さ、悲惨さを知って、平和を尊ぶ世代であってほしい。静かに語り、目を伏せた。

(勝浦美香)

8/18 神戸新聞分

75年前のこの状況を、現代の我々が理解できるかどうかは正直難しい。でも伝えていかなければいけない大切なことごあることを我々は理解しなければならぬ